

氏名(本籍)	いし	つか	おさむ	石塚修(栃木県)
学位の種類	博士(学術)			
学位記番号	博乙第2571号			
学位授与年月日	平成24年1月31日			
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	西鶴の文芸と茶の湯			
主査	筑波大学教授	文学博士	佐藤貢悦	
副査	筑波大学教授		仲田誠	
副査	筑波大学准教授	博士(学術)	平石典子	
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	大倉浩	
副査	筑波大学教授	博士(人文科学)	清登典子	

論文の内容の要旨

本論文は、浮世草子作家の嚆矢として、わが国の江戸時代前期とくに元禄時代を代表する作家の一人である井原西鶴(1642～1692)に関する研究である。筆者は、西鶴が活躍した元禄時代について、町人たちが経済的に裕福になり、和歌・能楽・香道・茶の湯などさまざまな文化的活動を展開した時代でもあったとの認識に立っている。そのうえで、本論文は、そうした文化的活動の活発化が、西鶴の文芸作品にも深く影響を与えていたはずであり、彼の作品にもそのような時代状況が投影されていたからこそ、多くの読者を得られたとの仮説を設定し、西鶴の作品群に散見する茶の湯文化を取りあげ、それが彼の作品構成そのものにどのような影響を与えたかについて考究したものである。

本論文の構成ならびに論旨は以下のとおりである。

第一部では、西鶴が浮世草子作家となる以前に活躍していた俳諧の世界と、茶の湯文化との関わりについて考察を試みた。西鶴は15才前後から俳諧を学びはじめたとされ、やがて21歳になった寛文2(1662)年には評点を付けるまでの実力を持つようになり、寛文13(1673)年、32歳の時に『生玉万句』興行を催して大坂における俳諧師としての地位を確立した。『好色一代男』の刊行が天和2(1682)年、西鶴41歳の時であるから、彼が浮世草子作家として活躍する以前のおよそ10年間は俳諧師として活躍していたことになる。西鶴の浮世草子にみられる茶の湯文化の影響を考える前提として、当時の著名な俳諧書や西鶴の俳諧作品から茶の湯と関わる事項を抽出・検証し、俳諧師西鶴が持っていたであろう「茶の湯知」の範囲を想定した。西鶴の浮世草子作品に、俳諧師として培った茶の湯の知識がどのように活かされているかを考察するに際して、この領域想定はきわめて重要な基礎的作業であった。

第一部第一章では、西鶴の俳諧師としての基礎知識を形成する源泉となったとされる『毛吹草』や『類船集』にみられる茶の湯に関する項目を精査し、『西鶴大矢数』にそうした知識がどのように反映されたかを考察することで、西鶴の「茶の湯知」の基層を確認した。その結果、西鶴にかぎらず、俳諧師として認知されるには、茶の湯に関する相当な知識が要求されていたことが判明した。

第二章では、前章で検証した俳諧師の茶の湯に関する知識が、たんなる形式的な知識にとどまらず、俳諧

師から浮世草子作家に転じた西鶴にとって、文芸を創作するうえでの感性のなかに多少なりとも影響をもたらした可能性を、俳諧用語の一つでもあり、茶の湯関連語としても重要な一語でもある「しほらし」に注目して考察した。その結果、俳諧の付け句の批評語として西鶴が用いた「しほらし」は、茶の湯文化と深く関わって用いられていたことが確認された。

第二部では、41歳で『好色一代男』を刊行して以降、俳諧師から浮世草子作家へと文芸活動の中心を移していった西鶴が、第一部で検証した「茶の湯知」を駆使することで作品としての表現構想を構築していたこと、その結果多くの読者を獲得できた可能性があること、こうした課題について西鶴の各作品を通して実証的に考究した。

第二部第一章では、西鶴の浮世草子としての処女作品であり、好色物の代表作である『好色一代男』のなかから、「後には様つけて呼」、「其面影は雪むかし」の二章を中心に、その記述内容と茶の湯との関係性の深さについて論じた。これらの章の中心人物である吉野や高橋の描写において、西鶴の持っていたと想定される「茶の湯知」との深い影響関係が認められ、とくに遊里という華美な世界で、あえて質素・素朴を重んじる「わび茶」のしつらえを演出したこと、そのことがそれぞれの章の人物描写などにおいてことのほか効果的に活かされていることを検証した。

第二章では『西鶴諸国ばなし』から「挑灯に朝顔」の章を取りあげた。この章そのものが「茶の湯」にまつわる話であり、そこにおいて西鶴の「茶の湯知」がどこまで作品の中に活かされ、当時の茶の湯の実態を反映させた作品構成となっているかについて、元禄期に盛んに板行されるようになった茶の湯に関する伝書を精査することを通して考察を進めた。その結果、この章の主題は、当時の茶の湯伝書にみられ、しかも一般的にも知られていた茶の湯の作法のあり方を、かえって意図的に不作法へと転換することで、読者に対して真の茶の湯のあり方について再考させるような、そうした構成になっていることが明らかとなった。

第三章では武家物の代表作である『武家義理物語』の「約束は雪の朝食」を取りあげ、そこに描かれた石川丈山の小栗への応接のあり方が、実は当時の茶の湯の作法にかなった対応であり、この章に込められた西鶴の意図は、茶の湯と深く関わる話として読者に受容された可能性が高いことを検証した。

第四章・第五章では、町人物を代表する『日本永代蔵』を取りあげ、第四章ではとくに、「茶の十徳も一度に皆」で、この章の主人公利助が非業の死を遂げる描写のあり方などにも、その章題にもなっている「茶の十徳」が強く意識されていることを、「茶の十徳」の歴史的な変遷を通して解明した。

第五章では、「世はぬき取の観音の眼」および「心を畳込古筆屏風」の二章を、茶の湯と深い関わりのある「目利き」という用語に注目して読み解いた。その結果、前者には元禄時代の町人階層における茶の湯の盛行による茶道具の不足という事態が強く影響していたことが判明し、後者では、当時の長崎の貿易状況と、茶の湯の道具として新たに注目を集めはじめ、市場価値を持ってきた「古筆」を取り巻く状況とが、深く関わっているところに成立した章であることが明らかになった。

第六章では、西鶴の遺稿集の一つであり西鶴という名の冠せられた最後の作品ともなった『西鶴名残の友』の最終章「入れ歯は花の昔」を取りあげ、西鶴の作品に反映している彼の茶の湯観が、利休流の「わび茶」の持つ感性に収斂されること、そのことがこの章において見事に結実している可能性があることを論証し、ついでに西鶴の晩年には明らかに「わび」への志向がみられることを論じた。

以上のような論証過程を経て、筆者はつぎのような結論を導出している。

西鶴の浮世草子の作品を、好色物・武家物・町人物、さらには遺稿集というように、作品全般を見通す形で茶の湯文化からの影響関係を検証した結果、浮世草子作家としての西鶴には、茶の湯からの影響が少なからずあったことが検証できたと考える。すなわち、西鶴の初期作品から遺稿集までにおいて、茶の湯からの影響関係を検証するなかで、西鶴の求めた茶の湯観が、芭蕉の求めた「わび」に通じる可能性があったと解釈されるに至った。このことは、西鶴の作家としての単純な進化とみなされるべきではなく、西鶴の人生そ

のものとも深く関係づけられ考究されるべき問題であるといえる。つまり、西鶴作品と茶の湯との関わりを時系列的に検証すると、彼は晩年に至って「わび茶」を志向してしたことが知られる。そのことは、西鶴が芭蕉の「わび」と類似した文芸観を、晩年において抱いていた可能性を示唆する。これを別の視点からいえば、西鶴が影響を受けた茶の湯文化は、千利休に代表される「わび茶」によるところが大きく、その美意識が作品に強く投影されていた可能性が高いということである。「わび茶」は、西鶴作品の人間洞察の鋭さと深く関わっていた。換言すれば、道具中心の茶の湯から、人間中心の茶の湯へと転換していった結果生まれた「わび茶」を、やはり西鶴もまた志向していたこと、そのことがとりもなおさず西鶴の文芸創作の関心が人間に向けられていたことと表裏しているからである。西鶴における茶の湯の受容とは、そうした必然性によってもたらされた結果でもあった。

また、西鶴研究も茶の湯研究も国際化を求められている昨今の研究情勢のなか、国際社会ではどのような研究が望まれるのか。今や西鶴研究においてもアジア文化圏や海洋文化圏といった視座が必要であろうし、茶の湯研究においも点茶方法や器物の研究から、精神性・人間性という普遍課題に取り組むことが今後の課題の一つともなろう。これと相表裏して、これまでの日本だけを視野においた文学研究から、国際社会に目を向けたわが国の戦略的文化発信へと、文学研究のあり方も社会の変化に応じた対応が求められるであろう。この視点に立って、終章においてはチュニジア共和国で行われた茶の湯を紹介する国際的プログラムの試行実例を取って記し、本研究を国際的に発展させるための方向性を示した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、俳諧と浮世草子を含む西鶴の膨大な作品群を丹念に読み解きながら、そこに散見する茶の湯の用語を詳細に分析しつつ、従来の研究においては必ずしも明確ではなかった西鶴の文学と茶の湯文化との深い関わりについて、はじめて総合的に闡明したものである。その手堅い研究方法によって、各所に新知見を開陳しながら同時に説得力ある論述を展開したことは、筆者が江戸時代を中心とする文芸、茶道、仏教、歴史、思想などの原典資料、先行研究を広く渉猟し、永年に渡り研究誌に投稿してきた各種論攷を土台とし、該博な知識と緻密な検証とをもってその結論を導出したことによると思われる。他方で、西鶴が最終的に到達した境地について、同時代の文化人と茶の湯との関係をも視野にいたより多角的な検証が必要であること、また俳諧や茶の湯などを含む日本文化を世界に向けて発進するには、より具体的にどのような取り組みがなされるべきかということ、これら諸課題についてはなお継続的な考究が待たれるであろう。以上を要するに、本論文に開陳された種々の新知見とその集大成としての結論とが、今日の学界に対する確かな貢献であることは疑いえないと判断される。

平成 23 年 12 月 13 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条 (2) に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士 (学術) の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。